

## 明石の史跡（41）西林寺の永井荷風



東京大空襲（昭和20年3月10日）により、26年住み慣れた偏奇館を失い、「われは着の身着のまま家も蔵書もなき身」となった荷風は、3月20日、菅原明朗氏を訪ねて、行く末について相談する（以下出典を明記しない場合は、「罹災日録」『筑摩書房現代日本文学全集16』による）。氏は、埼玉県志木町あたりの農家を手配する。空襲は激化し、5月30日に志木町への避難を菅原氏に伝えた。翌日に現地を訪ねたところ、空室なき有様であった。そこで菅原氏は、自分の郷里である明石行きを勧めることになる。熟慮のすえ、荷風は「関西にさすらい行く」ことを決意。6月2日午後4時半、東京発罹災民専用大阪きに乗車。一路東海道を西下。翌3日午前6時すぎに京都着。ただちに明石行電車に乗り換え、正午前には菅原氏の自邸（大蔵町8丁目）に到着。ここにも罹災者の先客がおり、やむを得ず、当分は西林寺に厄介になることとなる。庵室より淡路島を望む景色は、荷風をして「何等の至福ぞや」といわしめている。

心の落ち着きを取り戻した荷風は、大蔵谷の海岸をはじめ、明石城公園から明石神社・人丸神社を散歩する（6月8日）。この頃に書かれた一句が、西林寺に現存する（先般、二階堂正純住職のご好意により拝見）。

稲妻や 世をすねて 竹の奥 荷風

ところが6月9日の明石空襲は、せつかく落ち着きかけた荷風を、岡山市へと追いやってしまう。西林寺滞在は、わずかに10日であった。

7月15日、岡山市西部の庭瀬の福田村に足を留めた荷風のもとに、勝山町の谷崎潤一郎より書が届く。8月13日、午前9時20分岡山を出発。新見経由で午後1時半勝山に着く。ただちに谷崎を訪ね、8月15日の午前中まで会合が続く。午前11時20分の列車に乗車した荷風は、午後2時岡山駅に無事到着。正午の玉音放送はというと、車中で谷崎夫人より贈られた弁当を食し、睡魔にとらわれ、すべて夢の中だったようである。



西林寺